

森のちやれんがニュース

2025 冬

北海道博物館
HOKKAIDO MUSEUM

Newsletter vol.42

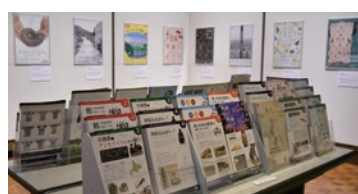


第25回企画テーマ展「新着資料・研究成果展」を開催しました (2025年10月18日～11月30日)

多岐に渡る博物館の活動のうち、資料収集や調査研究は、他の活動の基礎となる大切な仕事です。これらの普段見えない部分をご紹介しますために、当館が寄贈を受けた新着資料や、最近実施した研究プロジェクトの成果から、4つのトピックを取り上げた展示を開催しました。新着資料展として「アイヌ語研究者・知里真志保ゆかりの資料」と「模型でみる北海道の歴史的建造物」を、研究成果展として「北海道における戦中・戦後のくらしの変化に関する記録調査」と「奥尻島の自然・歴史・文化に関する研究－2019～2023年の成果報告－」を展開し、様々な専門を持つ学芸職員による日々の活動を資料やパネルで紹介しました。

また、開館10周年記念展示「続・北海道博物館10年間のあゆみ」を同時開催しました。ここでは、当館の前身である2つの機関のあゆみを紹介する動画や、これまでの企画テーマ展や蔵出し展などのポスターが展示されました。

これらの展示を通して、当館のこれまでの活動を一緒に振り返っていただけたら幸いです。(学芸員 鈴木あすみ)



「続・北海道博物館10年間のあゆみ」

CONTENTS

- ② **収蔵資料紹介**
恐竜時代の地層を貫く岩石：ランプロファイアー
- ③ **総合展示資料紹介・第4テーマ**
引揚の記憶－樺太連盟資料から－
- 研究活動紹介**
- ④ 文化財を守る臨床現場
－博物館で行う「モノの病理学」の研究－
解説案内スタッフレポート
体験！発見！?工作…etc
- ⑥ **トピックス**
めざせ学芸員！
今年度も博物館実習を実施しました
アイヌ民族文化研究センターだより
アイヌ文化紹介小冊子「ボン カンピソ」のご紹介
「科学ヘジャンプ・イン・北海道2025」に参加しました
- ⑧ **活動ダイアリー**
2025年9月～2025年11月の記録



収蔵資料紹介

恐竜時代の地層を貫く岩石：ランプロファイアー

久保見 幸

北海道研究センター(自然系) 学芸員

今回は、2022年に収蔵した少し珍しい岩石標本を紹介します。写真1の岩石は、「ランプロファイアー」と呼ばれる岩石で、鉱物の一種の黒雲母を多く含み、肉眼でも確認できるほどキラキラと綺麗に光って見えるのが特徴です。この岩石標本は筆者が当館に赴任して初めて、先輩からの指導を受けながら、資料調査や収蔵を行った標本であり、思い出に残る資料の一つです。今回はこの資料の地質・岩石学的な側面をご紹介します。

ランプロファイアーは、火山のマグマが固まってできた火成岩の一種で、黒色～灰色を示します。鉱物は、主に黒雲母や単斜輝石などの有色鉱物を含みます(写真1)。この岩石は、北海道の浦河地方の乳呑川流域に露出しており、黒雲母の放射年代測定から、新第三紀中新世(約1,770万年前)に形成されたと推定されています(久保・佐藤,1984)。また、浦河地方には、この岩石以外にも「蝦夷層群」と呼ばれる白亜紀～古第三紀の海の泥や砂が固まってできた地層が分布します(酒井・蟹江,1986:図1左)。蝦夷層群は、恐竜やアンモナイト化石が数多く産出する、日本の恐竜時代を代表する地層の一つです。実は、浦河地方のランプロファイアーの形成は、蝦夷層群の地層と密接に関係します。

一般的に地層は、泥や砂が水中で平行に堆積して形成され、ケーキの断面のような縞模様が見えるのが特徴です(図1右①)。一方、火成岩は、火山の噴火でもたらされたマグマが固まってできる岩石ですが、堆積した地層の割れ目に沿ってマグマが入り込んで固まってしまうことがあります(図1右②)。これをマグマの「貫入」といい、形成された岩石を「貫入岩」といいます。すなわち、この岩石は、恐竜時代(約1億年前)の海で堆積した蝦夷層群の地層に対して、約1,770万年前、

ランプロファイアーのもととなるマグマが貫入して固まってできました(図1)。この岩石をさらに詳しく調べていくと、過去の北海道でどのような火山活動があったのかを明らかにすることができます。このように、北海道の地史を解明する上で重要な資料であるため、これから後世にきちんと残るよう適切に保管していきます。なお、

この資料は2026年4月～8月のクローズアップ展示0にて公開予定です。で、ぜひご覧ください！

引用文献

久保和也・佐藤博之, 1984, 北海道浦河地域のランプロファイアー. 地質学雑誌, 90, 717-731.

酒井 彰・蟹江康光, 1986, 西舎地域の地質. 地域地質研究報告(5万分の1地質図幅). 地質調査所, 92p.

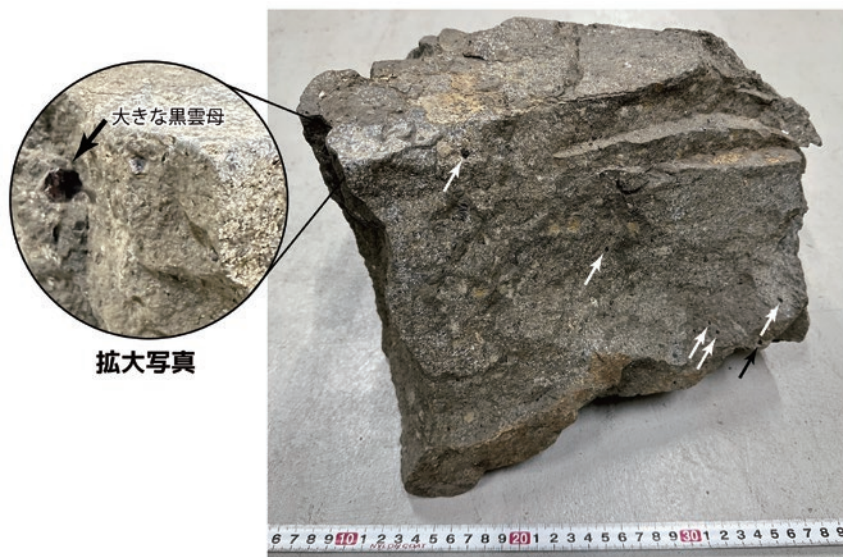


写真1 当館所蔵のランプロファイアー（資料番号 186617）。矢印の部分は鉱物の黒雲母。

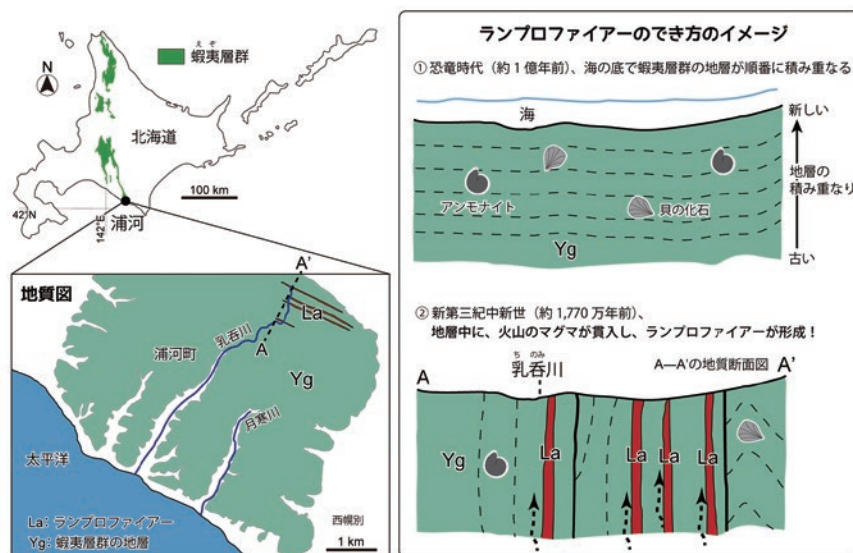


図1 北海道浦河地方の蝦夷層群とランプロファイアーの分布図。地質図と地質断面図は、5万分の1地質図幅「西舎」(酒井・蟹江, 1986)を参考に作成。

総合展示資料紹介・第4テーマ

引揚の記憶 - 全国樺太連盟資料から -

石 子 智 康

北海道研究センター(人文系) 学芸員

森のちゃれんがニュースのVol.41にて、総合展示第4テーマのリニューアルについてお伝えしました。今回は、リニューアルに併せて、新しく展示した資料の中から、樺太からの引揚に関する資料をご紹介します。

全国樺太連盟資料について

当館では、2020(令和2)年に、一般社団法人全国樺太連盟から資料を受け入れました。全国樺太連盟(以下、樺太連盟)とは、1948(昭和23)年に樺太からの引揚者の援護や厚生、福利を目的に、樺太引揚者によって設立され、会員の高齢化や減少に伴い、2021(令和3)年に解散した団体です。この樺太連盟が行ってきた、多岐にわたる活動の中で、「樺太博物館」の設立に向けた資料収集がありました。この活動では、会員に呼びかけ、全国から樺太に関する資料を約9,000件近く収集しています。1992(平成4)年からは、北海道庁西18丁目別館に「樺太関係資料展示室」、2004(平成16)年からは道庁赤れんが庁舎2階で「樺太関係資料館」として、これまで収集した資料を展示していました。加えて、全国各地で移動展を開催し、樺太の記憶を継承する活動を実施していました。

このように全国から収集し、展示に活用していた樺太連盟の資料は、2019(令和元)年に北海道博物館への移譲が決定しました。しかしながら、新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受け、2020年12月から順次、資料の受入を行いました。これらの資料は、『北海道博物館資料目録第3号 全国樺太連盟資料1』(2024年3月)で文書資料と図書資料、『北海道博物館資料目録第4号 全国樺太連盟資料2』(2025年3月)では絵葉書、写真や映像などの記録資料、生活資料などに加えて、稚内市へ移譲された資料について目録化しています。なお、これらのPDFデータは当館ウェブサイトで公開しています。

引揚証明書

上記のように受入を行った全国樺太連盟資料の中から、総合展示第4テーマでは「引揚証明書」を展示しています(写真1)。引揚証明書とは、その名の通り、海外から引き揚げてきたことを証明する書類で、本籍地や引揚前の住所、職業が記載されています。また、被服の点数や食糧、日用品の支給状況についても記載があります。樺太からの公式引揚は1946(昭和21)年か

ら開始されているため、本資料は、その第一次引揚の際に発行された証明書になります。第一次引揚では、5,000人を超える人々が日本へ引き揚げてきました。公式引揚は、度々の中断がありながらも1949(昭和24)年まで続き、約25万人以上が引き揚げてきました。しかしながら、引き揚げられなかった人々、いわゆる残留の問題は、その後も続いています。

以上、総合展示第4テーマの全国樺太連盟資料を紹介しました。また、全国樺太連盟資料の一部は、2025年7月にリニューアルした道庁赤れんが庁舎地下1階「樺太関係資料室」でも展示しています(写真2)。ぜひそちらにも足をお運びください。

参考文献

『北海道博物館資料目録第3号 全国樺太連盟資料1』(2024年3月)
『北海道博物館資料目録第4号 全国樺太連盟資料2』(2025年3月)
函館引揚援護局局史係編『函館引揚援護局史』1950年、函館引揚援護局

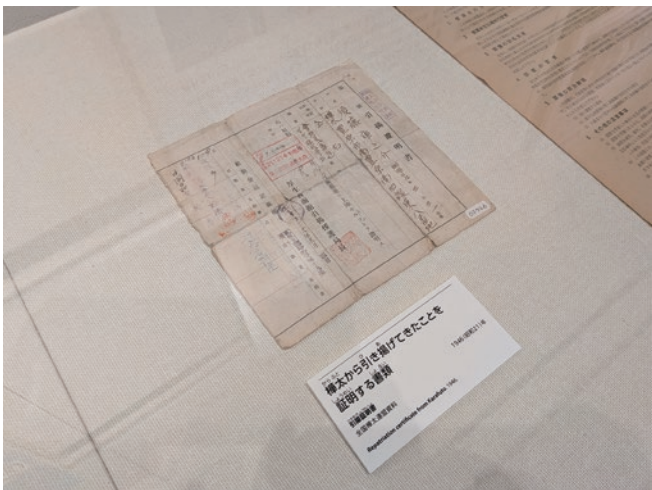


写真1 総合展示第4テーマ「引揚証明書」

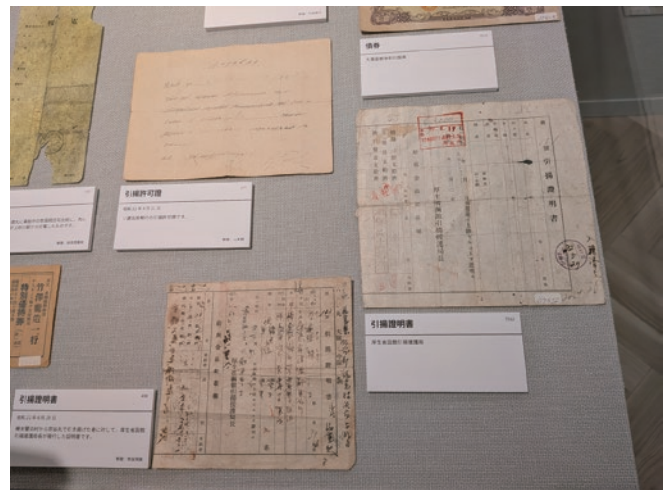


写真2 樺太関係資料室での展示(道庁赤れんが庁舎地下1階)

研究活動紹介

文化財を守る臨床現場
－博物館で行う“モノの病理学”の研究－

高橋 佳久

博物館研究センター 学芸員



1985年生まれ。北海道苫小牧市出身。2022年から当館学芸員。専門は文化財保存科学。写真は、イギリスのV&A East Storehouse（文化財の保存と公開を同時に行う巨大な収蔵庫）にて。



文化財の体系図
(文化庁)

文化財保存科学とは？

今回は、私が専門としている「文化財保存科学」の研究活動をご紹介します。ほとんどの方にとって聞きなじみのない言葉ですので、どのようなことを目的とする学問分野なのか、まずそこからご説明します。なお、そもそも「文化財」とは何を指すのかについては、右上の文化庁のWebサイトからご覧下さい。

文化財保存科学の目的について、東京国立文化財研究所（現、東京文化財研究所）の所長であった関野克博士（東京大学名誉教授、文化功労者）は、以下のように端的にまとめておられます（関野1964）。

<文化財保存科学の目的>

1. 文化財の構造と材質の究明
2. 内的外的条件によって生ずる変化及び老化の現象を分析し、文化財の保存と修理に役立たせること
3. 光、温湿度、水、汚染空気、害虫、^{ばい菌}微生物、震動等の文化財に及ぼす影響の理解とその防除

特に3について関野博士は、「不良環境は老化と破損乃至崩壊の主原因であり、文化財の保存と修復は、環境の改善を行なうと同時に破損したものの科学的な修理を実施することである」と述べており、「それは病理学における予防と治療の立場に似ている」と書かれています。病理学とは、人間の体の中で起こる変化を見つめ、病気の原因や進み方を解き明かす基礎医学の一分野です。文化財保存科学は、文

化財の変化を見つめ、その原因や進み方を理解し、保存と修理・修復（変化に対する予防と治療）に役立てようとしています。

つまり、タイトルにあるように文化財保存科学は文化財を構成するあらゆる“モノの病理学”であり、私が日々取り組んでいる仕事の内容は、先人たちが取り組んできた“モノの病理学”の科学的・技術的知見を根拠とした現場での予防や治療の実践と言えます。

文化財に長生きしてもらうことの意義と業務上の主要な研究テーマ

当館で所蔵している文化財は、北海道民の共有財産です。これらを後世に守り伝えていくことによって、この地に暮らす人々の歴史や文化、自然のありさまを知ることができます。そのためには、少しでも文化財に長生きしてもらう必要があります。そこで、①文化財が変化する原因と進み方を解明すること、②文化財が変化する原因を取り除き変化の進み方を小さくすること、③文化財の修理・修復と保存環境管理を通じて長期保管すること、これらが業務上の主要な研究テーマとなります。文化財を数多く所蔵する博物館や研究調査の現場は、資料に変化が起こる前線に近いので、特に②と③に関する研究活動と現場での実践、そして学会や研究会などを通じた他の博物館や研究機関との幅広い情報共有が重要となります。

モノをむしばむ要因と防除のための具体的な研究事例

ここからは、文化財を構成するさまざまなモノをむしばむ要因と、具体的

な研究事例について見ていきましょう。文化財が保存管理上望ましくない方向に変化する要因には、物理的要因、化学的要因、生物的要因があります。さらにはこれらの要因が複雑にからみ合って問題が起きている場合も少なくありません。そのため、たいていは問題解決までに長い時間と労力を要します。今回は私が館内で取り組んでいる生物被害対策と文化財の修理・修復に関する実践の一端をご紹介します。

紙資料を食べる害虫の存在とその防除対策

当館は周囲を豊かな自然に囲まれた環境に立地しているため、季節を問わず多くの虫たちが館内に侵入してきます。虫たちの中には、文化財を食べて自身の栄養源にしてしまう種類のものも含まれており、それらが館内で繁殖しないように早期発見・駆除する必要があります。このほど当館で、周囲の自然環境からとは異なるルートで侵入したと考えられる害虫が発見されました。その虫は、シミ（紙魚）と呼ばれる主に紙を食害する昆虫で、国内初記録（Shimada et al.2022）となったニューハクシミです（写真1）。

ニューハクシミはこれまで雌の個体しか発見されておらず、単為生殖（雌が単独で子をつくること）をすることがわかっています。また、2025年11月現在、全国19都道府県にまで分布を拡



撮影：北海道博物館 堀繁久学芸員

写真1 当館で捕獲したニューハクシミ

大していることもわかっています。このニュウハクシミがいつどのような形で当館に侵入したのか、今のところよくわかりませんが、資料の貸し借りの際に梱包資材等に紛れ込んだ可能性が考えられます。

ニュウハクシミの恐ろしいところは、その繁殖力の強さです。わずか1個体でも侵入され産卵を許してしまうと、その後ねずみ算式に数が増えていってしまいます(計算上は1個体がわずかに3年で約2万個体にもなります)。このことが、完全な駆除をととても難しくしています。

当館は文書資料を含む多くの紙資料を所蔵していますので、まずは資料を安全な形で避難させるために、ニュウハクシミが紙資料に到達できないようにする方法を考えました(高橋 2024)。これまで、殺虫・殺菌を同時に行える手段として、燻蒸^{くんじょう}という方法が使われてきました。燻蒸とは、気体の化学薬剤を使って、短期間で一度に害虫や菌類を殺滅する方法です。燻蒸が文化財を守る手段として非常に大きな役割を果たしてきたことは間違いありませんが、化学薬剤に含まれる成分が人体や地球環境に悪影響を及ぼす(強力な温室効果があるなど)ことから、近年生産や販売が相次いで停止されています。このような背景から、今後化学薬剤を用いた燻蒸が実施できなくなる可能性が考えられます。

当館では、化学薬剤に頼り過ぎずには害虫や菌類を制御するための文化財IPM(Integrated Pest Management: 総合的有害生物管理)の仕組みを取り入れて実践していますが、これから積極的に新たな防除方法を研究・開発して取り入れていきたいと考えています。

臨床的な展示資料の修理・修復

当館に隣接する野外博物館北海道開拓の村は、移築復原した建物との調和を目的としたさまざまな修景展示や、人形や動物の模型を用いた生き生きとした生活環境の再現展示が見どころの一つです。このような手法による展示は、開村当時とても画期的で大きな注目を集めたものと考えられますが、すでに40年以上が経過し、展示資料や展示制作物に経年による劣化が見られるようになってきました。また、観覧

中や清掃中の意図しない事故によって展示物が破損してしまうこともあります。このような場合、可能な範囲で修理・修復を行います(一般的に、高度な技術やさまざまな材料を用いている絵画などの美術作品は、知識と経験を持つ専門家に有償で修理を委託することが多いです)。

ここでは、破損してしまった磁器の修理・修復事例をご紹介します。まず肉眼や顕微鏡などを用いて資料を良く観察します。観察によって得られる情報はとても多く、破断面の状態や破片の接合の仕方を見極めます(外観だけでは構造や状態がわからない仏像など大型の立体物を修理・修復する際には、X線CT装置などの非破壊検査装置が用いられることもあります)。今回修理・修復した資料は、口縁部から高台にかけて大きく亀裂が生じていることが観察できました(写真2)。破損した部分だけを接合しても、底部の亀裂が広がって再度破損してしまう可能性が考えられたため、亀裂部分も補強することにしました。

金継ぎなどで知られるように、磁器は漆を用いて修理・修復することができます。しかし、日常生活で用いる食器としてではなく、文化財として保存・活用する博物館資料の場合には、アセトンなどの有機溶剤で溶解して使用するアクリル系樹脂(パラロイドB72など)を用いることが多いです。その理由として、修理・修復に用いる材料は可逆性(後から修理前の状態に戻せること)のあるものを用いる原則があることが挙げられます。なぜ可逆性が求められるかといいますと、将来より良い材料や方法が見つかった場合に、修理・修復をやり直すことができるようにするためです。

このように、文化財の修理・修復を行う上では、過去の文化財保存科学の研究成果で明らかになった知見を援用し、可逆性を持たせるなど基本的な原則や倫理を守ることが大切です。私自身は、修理・修復技術者としての専門的な訓練を受けた経験はほとんどないため、専門家が作成した文化財の修理報告書や学会などでの事例報告を参照しながら、知識の修得と技能の向上に努めています。



写真2 高台を横断する大きな亀裂

頭と手の両方を動かせる人材を目指して

私が博物館で文化財保存科学担当学芸員として働き始めて3年半が経過しましたが、知識も経験も明らかに不足していると感じています。日々突き当たる問題に適切に対処していくためには、物理・化学・生物などの理化学的な知識や法則の理解にとどまらず、時には統計学や数学などのやや発展的な知識も要求されます。また、今後予防保存的な環境管理を行う者(Preventive Conservator)としての仕事を超えて、修理・修復の理念や技能に関することもしっかりとカバーしていくことが望まれます。さらには、被災した資料の応急処置や安定化処理など、災害前に身に付けておかなければならない事柄も多いです。引き続き自己研鑽を重ねながら、地道に研究成果を積み上げていきたいと考えています。

筆者のこれまでの研究活動内容については、以下のページをご覧ください。
https://researchmap.jp/yoshihisa_takahashi

引用文献

- 関野克(1964)文化財保存科学研究概説. 保存科学, 1: 1-6. 東京国立文化財研究所.
高橋佳久(2024)ニュウハクシミに対する簡便な物理的防除方法の開発. 北海道博物館研究紀要, 9: 1-17. 北海道博物館.
Shimada, M., Watanabe, H., Komine, Y., Kigawa, R., Sato, Y. (2022) New records of *Ctenolepisma calvum* (Ritter, 1910) (*Zygentoma*, *Lepismatidae*) from Japan, *Biodiversity Data Journal* 10.

解説案内スタッフレポート

体験！発見!? 工作…etc

こんにちは、みなさん。はっけん広場のお話をさせていただきます。

まず、はっけん広場には40以上の「はっけんキット」というBoxを設けています。縄文、アイヌ文化、昔から使われている生活道具、生物などに関するものを触ったり、動かしたり、観察する、体験ができるキットが入っている箱です。ここでは解説案内スタッフが常駐していてBoxの中身の使い方をお伝えすることもあります。親子や親子三世代で来られる方もいますので、子どもやお孫さんへ使い方を伝承する姿も珍しくありません。そして、家族内での情報共有だけではなくお客様の昔の体験談をスタッフへ語り繋いでいただく

事もあり、とても興味深くお話を聞かせていただいています。このような事は解説業務にとっても役立ち、展示物と同じように大切な宝ものになります。

また、はっけん広場では、土・日・祝日・振替休日に開催している「はっけんイベント」というものがあります。イベントは歴史を感じられる技術、手先の器用さ、創造性を高められる工作です。時期によって内容は異なりますが、お時間がありましたら是非、足をお運び下さい。

写真は野幌森林公園にも生息しているシマエナガを「モビール」にしてみました。子どもから大人の方までお楽しみいただきました。



トピックス

めざせ学芸員！ 今年度も博物館実習を実施しました

当館では、学芸員資格取得を目指す学生を対象に、博物館での現地実習を行う「博物館実習」を、毎年8月に実施しています。今年は、8月19日（火）から29日（金）の期間（25日（月）を除く10日間）で、北海道内外から15名の実習生を受け入れました。

初日は、収蔵庫の見学や、学芸員の視点で総合展示を見学し、展示の工夫や改善点等のディスカッションを行いました。2～6日目は、当館の各研究センターの学芸職員が1日ずつ担当し、各分野の専門的資料の整理や普及

行事の企画等の研修を行い、学芸員としての業務の基本を学びました。6日目の午後は、展示製作実習に向けたガイダンスを実施、その後野外博物館北海道開拓の村へ行き、資料管理や来村者への解説について当館の事例と比較しながら見学しました。7～9日目は、3班に分かれ、展示制作実習を行いました。今年度も「総合展示の各テーマに関連した展示」をテーマとして、展示企画から資料の選定、パネル制作等を実習生が主体となり実施しました。最終日には、展示発表会を行い、意見

交換を行いました。最後には、発表会で受けた指導もふまえ、来館者にもみていただけるように総合展示室2階に展示を設置しました。その成果は、8月30日（土）から9月26日（金）まで公開し、多くの来館者にご観覧いただきました。

実習生の皆さんからは、「学芸員としての視点、資料や研究に向き合うことの大切さ、伝え方の重要性を学ぶことができた。」との声を聞くことができました。

久保見 幸

総務部企画課 学芸員



文書資料の整理の様子



展示発表会の様子

アイヌ民族文化研究センターだより

アイヌ文化紹介小冊子『ポン カンピソシ』のご紹介

石井 祐 実

アイヌ民族文化研究センター 学芸員

当館アイヌ民族文化研究センターでは、アイヌ文化紹介小冊子『ポン カンピソシ』を編集・発行しています。現在、1「イタク はなす」、2「イミ 着る」、3「イペ 食べる」、4「チセ 住まい」、5「イノミ 祈る」、6「ウエネウサラ 口頭文芸」、7「芸能」、8「民具」、9「地名」を刊行しています。それぞれの巻では、テーマに関する

専門的な内容をわかりやすく解説し、学習に役立つ参考文献も紹介しています。巻によっては、見学や体験ができる関連施設の情報も掲載し、アイヌ文化をより深く理解していただけるよう工夫しています。今年度は2巻・5巻・6巻の増刷を行い、より読みやすく、より新しい情報をお届けできるよう、内容の更新や情報の追加などの改訂を

行いました。

この小冊子は当館総合展示室や図書室などで配布しているほか、当館Webサイトでは小冊子のPDF版をダウンロードすることができます。いずれも無償ですので、アイヌ文化をもっと知りたい！という方はぜひこの小冊子を手にとってみてください。



アイヌ文化紹介小冊子『ポン カンピソシ』

PDF版はこちらから



<https://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp/study/ainu-culture/>

「科学ヘジャンプ・イン・北海道2025」に参加しました

亀丸 由紀子

アイヌ民族文化研究センター 学芸員

去る9月27日(土)、北海道札幌視覚支援学校を会場にして視覚に障がいのある小中高生を対象に開催されたイベント「科学ヘジャンプ・イン・北海道2025」に参加してきました。北海道博物館は、数年前からこのイベントに参加してきましたが、今年は、昨年に

引き続き「樹皮でつくった衣服を触ってみよう！」というワークショップを行いました。ワークショップでは、オヒョウという木の樹皮から作った繊維を使って製作された衣服(樹皮衣)について知ってもらうため、樹皮や繊維のサンプル、糸玉などの触れる資料を

用いて樹皮衣の製作工程を紹介しました。イベントの最後には、参加者に実際に樹皮衣を着てもらい、樹皮の肌触りや質感、衣服に施された刺繍のようすなどをじっくり体感してもらいました。



写真1 右からオヒョウの木の樹皮、内皮、繊維、糸玉



写真2 参加者に着用してもらった樹皮衣

活動ダイアリー

2025年9月～2025年11月の記録

※■は展示活動、■は教育普及活動、■はその他の博物館活動です。

9月7日(日)

■特別イベント「(講談とトーク) 講談「新撰組十勇士伝」と晩年の永倉新八」を開催。講師：三代目松林伯知氏(講談師)、杉村悦郎氏(ライター/永倉新八ひ孫)。

9月13日(土)

■古文書講座「ちゃれんが古文書クラブ(全12回)⑧」を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。

9月15日(月・祝)

■屋上スカイビュー特別開放を開催。

■第11回特別展開連ミュージアムトークを開催。担当：三浦泰之。

■第11回特別展「新選組永倉新八と会津藩士 栗田鉄馬二人のサムライが歩んだ幕末・近代」閉会。【写真1】

9月17日(水)

■館内定例研究報告会を開催。発表者：圓谷 昂史・甲地利恵。

9月23日(火・祝)

■屋上スカイビュー特別開放を開催。

9月27日(土)

■アイヌ語講座「アイヌ語講座～ききおこしのキ～」を開催。担当：吉川佳見。

10月4日(土)

■古文書講座「ちゃれんが古文書クラブ(全12回)⑨」を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。

■子どもワークショップ「ヒツジの毛にふれてみよう ②初めての草木染め(同日2回開催)」を開催。担当：会田理人・谷口生貴斗。【写真2】

■はっけんイベント「シマエナガモビールをつくらう」を開催(11月30日までの土・日・祝・振)。

10月10日(金)

■総合展示室 クローズアップ展示①、②を展示入替(12月17日(水)まで)。

①『蝦夷島奇観』模写本から①—クナシリ島イコリカヤニ肖像—。

②北海道と野球。

10月11日(土)

■ちゃれんがワークショップ「DNA実験入門—あなたのお酒耐性は?—」を開催。担当：表溪太。【写真3】

10月13日(月・祝)

■ミュージアムトークを開催。担当：高橋佳久。

10月18日(土)

■第25回企画テーマ展「新着資料・研究成果展」開催(11月30日(日)まで)。

■ミュージアムカレッジ「寛政年間の幕府蝦夷地調査と秦檎丸」を開催。担当：東俊佑。

10月22日(水)

■館内定例研究報告会を開催。発表者：田中祐未・鈴木あすみ。

10月25日(土)

■古文書講座「ちゃれんが古文書クラブ(全12回)⑩」を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。

■子どもワークショップ「親子で探検! 森のコレクションをつくらう」を開催。担当：鈴木あすみ・表溪太・久保見幸・櫻井万里子。

11月1日(土)

■自然観察会「落ち葉であそぼう!」悪天候により中止。担当：水島未記・成田敦史・表溪太・堀繁久、自然ふれあい交流館スタッフ。

■講演会「『長濱清蔵のアイヌ語』を刊行して」を開催。講師：藤田護氏(慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス環境情報学部専任講師)、瀧口タ美氏(編集グループSURE代表)。

11月8日(土)

■ミュージアムカレッジ「北海道のリンゴ栽培の歴史」を開催。担当：山際秀紀。

11月15日(土)

■古文書講座「ちゃれんが古文書クラブ(全12回)⑪」を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。

11月23日(日・祝)

■第25回企画テーマ展開連ミュージアムトークを開催。担当：山際秀紀。

11月30日(日)

■ちゃれんがワークショップ「恐竜時代の岩石を使って、地質図をつくってみよう!」を開催。担当：久保見幸。【写真4】

■第25回企画テーマ展「新着資料・研究成果展」閉会。【写真5】



写真1



写真2



写真3



写真4



写真5

来館者数

○2025年9月～2025年11月

総合展示室 22,736人 特別展示室 9,535(内 特別展4,297)人 はっけん広場 2,589人

○累計(2015年4月～2025年11月)

総合展示室 947,907人 特別展示室 640,917人 はっけん広場 142,951人

森のちゃれんがニュース 第42号

発行日: 2026年1月10日

編集・発行: 北海道博物館

〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2

Tel. (011) 898-0456 Fax. (011) 898-2657

ウェブサイト <https://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp>

©Hokkaido Museum, 2026